



かんわ Letter vol.6 Sep②.2014



こんにちは、緩和ケア普及室です。テニスの全米オープンで錦織圭くんが準優勝しましたね！日本人初です！錦織くんの快進撃の裏に鬼コーチ、マイケル・チャンがいたことは有名な話ですが、錦織くんは敵しいちゃんだけでなく、穏やかで楽観的なダンテ・ボツティーンというコーチと2人体制で練習を重ねていたようです。実践に裏づけされた敵しさと前に進むための楽観的な捉え方、両方のコーチングで錦織くんは結果が出せたんですね。そういえば、私が認定教育過程を過ごした実践教育センターでも、担当教員は敵しい先生と友達のような先生と2人いて、うまく役割分担していたことを思い出します。…あれもあえてだったんでしょうか？さて6人目のメンバー紹介は、センター配属前にそんな認定の学校の教員の経験もあるこの方です。



「求められる存在になるために」 酒井由香科長

5西病棟の看護科長の酒井です。私は、2009年からPCTメンバーであり、がん性疼痛看護認定看護師として活動してきました。今までは、所属病棟に疼痛を有する患者さんが少なかったのですが、4月に5西病棟に異動し、疼痛を有する患者さんの相談を受けることが多くなり、関わりを通して多くのことを学ばせていただいています。そこで今回は、改めてこの分野の認定看護師の役割と活動についてお伝えしたいと考えました。「がん性疼痛看護」は1998年に認定看護師分野に特定されました。院内には、3名配属されています。がん性疼痛看護認定看護師は、疼痛の全人的ペインアセスメントと症状マネジメント、薬物療法の適切な使用と管理およびその効果の評価といった知識と技術をもっています。がん患者さんの診断・治療時期から終末期まで、がん

性疼痛を有する患者に対して全人的な視点でアセスメントを行い、痛みを総合的な評価と個別ケアを通し、苦痛を取り除くことでQOLを高められるよう援助を行なっています。薬剤の適切な使用および疼痛緩和が特化した技術であり、マネジメントする上で、薬物療法に使用する薬剤の薬理作用を理解し、適切に使用できるようにして効果を評価していくことも重要な能力となっています。また、私達認定看護師自らが実践モデルとなり、疼痛緩和に必要なケアの提供を行い、患者や家族に対して効果的な疼痛緩和が行えるよう指導します。さらには、他の看護職に対しても情報提供を行い、勉強会等を通して知識・技術の向上を目指しています。その中でがん性疼痛緩和についての相談を受け、相談者である看護職と共に考え、問題解決をしていくという役割も担っています。

「がん性疼痛」はがん患者におこる、とてもつらい症状の一つです。小児がんの臨床では、2013年にWHOガイドラインが整備されていますが、浸透していないと感じます。また成人に比較し、薬剤の使用量が細かく、個別的なアセスメントが重要です。がんそのものによる痛みだけでなく、がん治療に伴う疼痛（口内炎や照射による皮膚炎）がんの術後遷延する疼痛、帯状疱疹後の疼痛、褥瘡による痛みなどもがん患者さんの持つ痛みとして対応しています。相談には随時対応していきたいと思っていますので、遠慮なくお声かけください。興味のある方、関連文献をご紹介しますので、是非ご覧ください。痛みについて一緒に考えていきましょう！！

* 武田 文和 監訳：WHOガイドライン 病態に小児の持続性の痛みの薬による治療 金原出版2013.

* 岩崎紀久子、酒井由香、中尾正寿 編集：一般病棟でもできる！終末期がん患者の緩和ケア 第3版

日本看護協会出版会2014.

お問い合わせ：緩和ケア普及室 柏木順子【PHS5984】